

イチジクの生産安定技術の確立

第1報 水田転換圃のイチジクの生育

正田耕二・畠中 洋・金房和己・*森田 彰(福岡県農業総合試験場豊前分場・*福岡県農業総合試験場)

SHODA, K., H. HATANAKA, K. KANAFUSA and A. MORITA: Establishment of Techniques for Stabilization of Fig Fruit Production. 1. Growth of Fig Fruit in Converted Paddy Field (Temporary Drained)

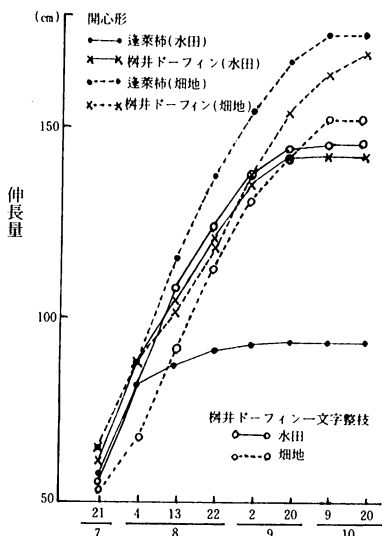
水田再編対策の推進に伴い、各地で転換した水田にイチジクが多く導入されるようになってきたので、主要な品種を用いて水田転換圃における適応性の検討を行うために、2年間生育量を調査し、畑地圃との比較検討を実施した。

1. 試験方法

水田転換圃8a(5m間隔に幅30cm, 深さ50cmの暗きよを設置)と畑地圃16aに、蓬萊柿(開心形; 栽植距離5.0m×5.0m)及び榊井ドーフィン(開心形; 4.5m×4.5m, 一文字整枝; 2.0m×4.0m)をそれぞれかまぼこ形(植つけ位置の高さ30cm)にうね立して1980年1月に植つた。植つけ当年は主枝候補枝につき、2年めは新梢について10日ごとに伸長量を調査した。なお、せん定方法は蓬萊柿では間引きせん定とし、榊井ドーフィンでは切返しせん定とした。

2. 結果及び考察

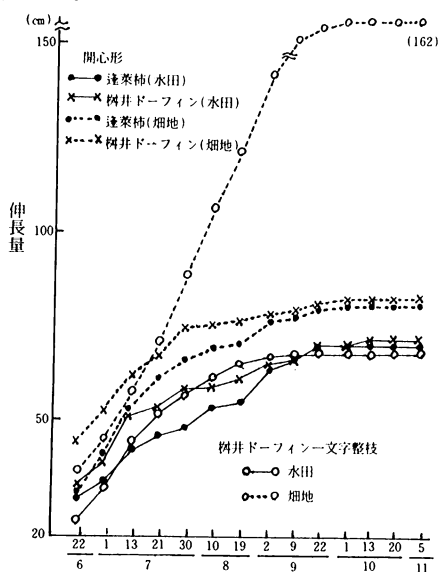
1) 1980年: 畑地圃の蓬萊柿は8月上旬から10月上旬まで徒長的に伸長したが、水田転換圃では7月下旬の大雨で伸長が鈍化し、8月下旬の長雨で伸長が停止した。榊井ドーフィンの開心形は、両圃とも同じような新梢伸長を示したが、9月下旬から10月上旬の乾燥で、水田転換圃の伸長がやや劣った。一文字整枝の伸長量は両圃ともほとんど差がなかった。



第1図 水田転換圃及び畑地圃の主枝平均伸長量 (1980年)

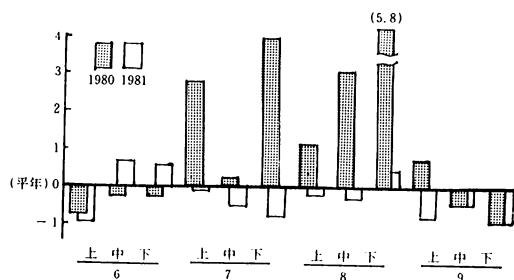
2) 1981年: 水田転換圃の開心形は、両品種とも長雨や乾燥によって新梢伸長が一時衰えたり、再伸長をくり返して生育が続けたが、畑地圃と同様に7月下旬から伸長が劣

り、10月初めに停止した。両圃の差は前年と異なり2品種とも10cm程度であった。しかし、一文字整枝は畑地圃では10月初めまで徒長したが、水田転換圃は乾燥の影響で早めに停止した。



第2図 水田転換圃及び畑地圃の新梢平均伸長量 (1981年)

蓬萊柿は、元来樹姿が立木性で根が深く入る性質があるため、水田転換圃では停滞水によって新梢伸長が鈍化した。榊井ドーフィンは低木性で根が浅いため一時的な停滞水よりも乾燥によって新梢伸長が左右された。また、榊井ドーフィンの一文字整枝は整枝上の特徴として結果母枝を強く切返すので、畑地圃では結果枝が徒長して収穫期が遅れたが、水田転換圃では新梢伸長の停止が早く、結果枝の充実がよく、果実が早熟になった。



第3図 1980~1981年の平年対比降雨量